

編 集 後 記

本学会誌の編集委員を拝命して6年が過ぎ、次の委員にバトンを渡すことになった。この間に学会の学術集会は年1回となり、本誌を通じての研究発表の重要性は以前にも増したはずである。しかるに投稿数の伸び悩みについてはほとんど毎号の編集後記で取り上げられており、学会全体で考えるべき大きな課題となっている。また採用になる論文の種別からいっても原著論文の比率が増えないことも気になる点である。因みに本号の構成を見ると、原著が5編、症例報告が18編、臨床経験が1編と研究会抄録となっている。むろん症例報告が重要でないわけではない。日常診療の現場では症例報告が果たす役割には大きなものがある。目の前の患者にどのように対してゆくべきかについてのヒントを与えられることも事実である。しかし一方で学問を進める力はやはり原著論文に多くを委ねられねばならないであろう。本誌が消化器外科領域の国内最高峰の学術誌であることには誰も異論がないものと思うが、その意味からは質の高い、最新の知見による論文が、数多く本誌をとうして世に真価を問われるのでなければなるまい。

論文種別は原著、症例報告、臨床経験、研究速報に依頼論文の5種であるが、現在委員会ではその種別について論議が行われている。著者がより適切なジャンルに投稿しやすいようにとの配慮からである。さらに今後は査読の方法や編集の企画についても、従来にも増して検討が加えられるはずである。投稿者にとっても読者にとってもより存在価値のある会誌を目指すためといえる。

編集後記に目を通す会員諸氏が一体どれくらい居られるものかと思う。編集委員長を始め委員達の悲鳴にも似た訴えも、とりわけ若い研究者には届いてはいないであろう。せめて彼らの指導者の方々に現状を厳しく捉えて頂きたいものと思う。

(秋本 伸)